

第1回「道史編さんに関する有識者懇談会」議事概要

日時：平成29年6月29日（木）10:00～12:00

場所：ホテルポールスター札幌 4階「ラベンダー」

【挨拶】（中野総務部長）

【事務局より説明】

道史編さん大綱について

【主な意見】

（桑原委員）

- （普及版）通史編について、「新撰北海道史」や「新北海道史」でも似たような形態を取っている。近代以前を新たに作り変えることが時間的にも財政的にも難しいのであれば、今の時点に立った色々な分野の研究成果を盛り込んだ分かりやすい通史を1巻にまとめて付けたらどうかと、相談に答えた経緯がある。
- ただし、それを1巻でやるかどうかはまた別の問題なので、場合によっては上下2巻にするということも考えられる。年表も、なかなか良く出来た年表なので、昭和40年代から後を付け足すという格好にして新しい北海道史の編集に資することにしたらどうか。
- 150年事業の中でこの「新北海道史」の続編の編集というのは後世に残る大変重要な事業だと思うので、一定の予算をかける意気込みをもって取り組んで欲しい。

（白木沢委員）

- 1970年から始める意味がわからない。「新北海道史」の後継史ということについての再検討がある。アイヌ史の専門家や近世史の専門家から、「新北海道史」の後継史という言葉に抵抗があるという意見を聞いている。アイヌ史、近世史と近代の戦争の歴史のところで、大分この2・30年に史観の変化があると思う。戦後史を重視するにしても、そこだけでは書きにくいという感じがする。
- 私は「新札幌市史」の編集員を14年間ほどやっていたが、10年間で5冊というのが可能であれば、この範囲で編目構成、中身については考える余地がある。部会制を取れば、同時にスタートして十分この事業規模で江戸時代や先史時代についても扱える。
- 資料編をたくさん出すという提案は、他府県の事例を踏襲していて、北海道としては初めて資料編重視という計画。一般の自治体史の在り方としては望ましいが、作る方の都合で考えると、資料調査や資料に即した解説というのは相当時間と手間がかかり仕事量が増える。北海道は本州とは違い、通史編を中心に作るという伝統がある。北海道には通史を書いた先生方が大勢いるので、通史編の方を増やして資料編を限定した方が、作る方としては作りやすい。読んで分かりやすいのは資料編より通史編の方だと思う。
- 通史編と全通史普及版の関係を、作る方から言わせていただくと、普及版通史よりも通史の方が書きやすい。だから、まず通史を近世・近代・現代の3巻構成、あるいは2巻構成くらいで刊行し、事業の終わりの方で普及版が書かれるのがよい。
- 北海道内の研究者の分布を考えた時に、戦前や近世が得意な方が多いので、現代史をやるから集まってくれと言っても誰が集まるかという問題がある。近代や江戸時代もあると頼みやすいので、戦後だけで通史1冊、資料編3冊というのはむしろ大変ではないか。
- 機関誌は、執筆者は刊行直前になって準備することになりがちであり、執筆者の仕事のペースを作っていくという意味がある。紙媒体か電子媒体かということは今の状況に合わせてらよい。

(坂下委員)

- 「新北海道史」の戦後の巻は、次の準備のための資料というだけなので、今回の道史を1970年から始めるべきではない。また戦後から始めるにしても、第一次大戦辺りまで遡らないと、1945年以降の位置づけもできない。できればもっと前から始めた方がよいが、編さん期間が10年の設定だととても無理だろう。
- 機関誌については、冊子体になるかどうか分からないが、編集者のやる気を出させる意味がある。色々な方に最新の研究動向を書いてもらうこともよいので、是非やって欲しい。

(横井委員)

- 「新北海道史」の戦後の部分は非常に不十分な段階であり、極端に言うと戦後は北海道史はなかったと言ってもよい。戦後史のところはきちんと書くというのが大事。
- 道教委で作っている「北海道教育史」の編さん計画との調整が必要。
- 戦後の通史編1冊に全分野が盛り込まれるとすると、1分野が非常に薄くなる。私はまず資料編をしっかりとという考えもあるが、資料も膨大にあると思うので、資料の所在をしっかりと通史の中で書いていけば、資料編をたくさん出さないで通史をもう少し膨らますやり方もあるのではないか。
- 全通史普及版とあるが、かなり学問が変化してきて新しい事実なり認識が出来ているので、過去のものを利用して書くというようにはいかず、結構労力がかかる。しかし、是非新たに書くという方針でやって欲しい。
- 事務局の体制はどのようになるか。「新札幌市史」での経験で言うと、専任の職員が資料を整理して、その編さん室に行けば色々なものが揃っているという状況を整えてくれていた。大学での教育活動など色々やることがあるので、体制をきちんと作っていただかないと時間がかかってしまうので、そのところをお願いしたい。

(山崎委員)

- 編さんの目的に関して、「歴史的資料を共有財産として後世に伝える」「学術・文化の振興への寄与」を是非重視してやって欲しい。新しい時代を対象とした道史、道政史の成果と教訓の双方を学べるような、また「今の北海道や、これからの北海道の在り方を考えるための、基礎資料ですよ」といえる道史とすべき。この時代の北海道は色々な大きな動きがあり、例えば苫東の開発や、全国に先駆けた環境アセスメント条例などを体系的に学べるようにしたい。
- 今や、北海道大学への留学生が、戦後の北海道開発や樺太からの引揚げを研究テーマとする時代になっている。研究の最初の手掛かりになる道史は、きちんとした視点で作られるべき。
- 現代になればなるほど資料がない。是非、資料収集・調査に本腰を入れてやって欲しい。また資料の不在を補う方法として、オーラルヒストリーという手法を、今回の道史の編さんの中で取り入れて欲しい。

(小内委員)

- 専門は地域社会学なので現代を中心にやっていて、それで声を掛けていただいたと思っていた。要望を踏まえた案に対しては、2つに分けることで両方が中途半端にならないか、その辺りが心配という印象を持っている。

(小川委員)

- 戦後、あるいは1970年以降だけ、というのは色々な意味で難しい。今回150年の事業の中で行うということであれば尚更、それ以前の北海道の歴史をもう一度捉え直す部分ということを含まざるを得ない。特にアイヌの人たちの歴史に関しては、ここ数十年で考え方が大きく変

わっている。

- 一方で、何十巻というレベルのものを一から作るのかということに関して言えば、時間的な問題や予算の問題など色々なことがあるので、無尽蔵に膨らませるという話にはならないだろう。
- 戦後の新しい時代で、重点的に取り上げるべきことはたくさんある。「新北海道史」の時には、明治・大正の開拓にかなり重点が置かれていたが、今回は、ここ数十年、北海道民が経験した様々な出来事の方に重点を置いていくことも大事。
- ここ150年の歴史、特に新しい時代の歴史に重点を置きながら、けれども北海道のかなり古い時期からの最近の研究成果を取り入れて、「北海道民が今北海道のことを振り返る時にはこの本を読む」というようなものを作るのが望ましい。

(中野座長代理)

- 元々この新しい道史の編さん事業は、予算的な制約もあり、前回の「新北海道史」以降に特化して始めようと動いていたが、先生方からもお話があったとおり、「新北海道史」が1970年まできちんとできているわけではないので、そこから先を継ぎ足せばよいというものではないというのはおっしゃるとおり。その一方で、今回は北海道命名から150年、おそらく都道府県の正史は100年単位くらいで書き直すところが多いのではないかと。今回は50年の刻みでもあり、先史から作り直すだけの財政的・時間的余裕が私どもにはない。そのあたりをどう調和させていくかということかと思っている。
- 主なところでは戦後で全編を通しつつ、一方で前の道史以降の研究成果なども反映させ、全通史の普及版で広く皆さんに読んでいただけるものも作り、さらに年表も補訂する。このような形で進めさせていただきたいと考えている。制約要因もある一方で、新しい北海道史にご期待いただいている部分もあるので、最大限可能なことをということで結論を見いだして行ければと思っている。